

農家生活と主婦像(3)

| | |
|-------|---|
| 誌名 | 農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan |
| ISSN | 05495202 |
| 著者 | 安藤, 義道 |
| 巻/号 | 48号 |
| 掲載ページ | p. 15-19 |
| 発行年月 | 1980年10月 |

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



農家生活と主婦像(3)

安藤 義道

1. はじめに

正月の仕度に母は、朝早くから隣近所を往復しやり場のない様を家全体に演出させ、昼食の時さえもあれやこれやと午後の算段を始めているのであった。母の印象全体を私は普段から少なからず心にとめておく。それは私自身も知らない血のつながりからか、それとも気の弱い私が、家で感じる母という、否、農家の主婦というポストの重大さからであるのか、とにかく私の記憶に印象付けられた母は、しじゅう家庭の中で躍動や沈滞、ひらたくいえば楽しさや悲しさ、憎しみや寂しさの頂点、そして底辺をささえていたように思う。

これは21歳の福島県出身の農村青年A君が書いた「私の母」が描くところの、農家の主婦の姿である。

かつて農家の嫁は“乳役兼用無角牛”といわれた。そこで求められた女性像というものは、後継ぎを生み育てる「家」の女であり、黙って働く「家」の労働力であった。子供を生めない嫁は、その責任が必ずしも自分になくても身を小さくすることを余儀なくされ、1日の日課も、家族の誰よりも早く起き、誰よりも遅く寝た。農作業や家事労働はもちろんのこと、舅・姑のふとんのあげ下し、部屋の掃除から鴨居のふき掃除まで敷しくさせられたもので、とても今の嫁さんには考えられない日々だった、とある81歳になる老農婦は語ってくれたことがある。今は農家でも嫁を大事にするようになって、むしろ年寄りが我慢しているから、というその老農婦ですら、農家の嫁は大変だという。

小倉武一氏によれば、農業を資本制生産の機能に擬制してみると、農民は企業者であり、資本家であり、技術者であり、労働者であり、地主であるという。(『農民と社会』昭和27年11月)「農業においては、その性質上、製造業ほど労働を多数に細分する余地はないし、またそれほど完全に仕事をたがいに分化する余地もない」(『諸国民の富』)というアダム・スミスの指摘は、農業の分業のむつかしさを物語っているが、小倉氏の指摘も農業経営のむつかしさを物語っている。分化・分業あるいは専門化のはげしい近代社会にあって、それに順応しきれない農業経営がいかに困難なものであるのかはいうまで

もないことであろう。そして、こうした農民でもあり主婦でもあった農家の主婦が、過去にあって、現在にあっていかに大変なものであったかは、さきの老農婦が認めるところである。

しかし、農家の主婦側に全く問題がなかったわけではない。それは、農業経営者として夫への依存的傾向をもち、経営技術の習得にいたっては他力型の経験的習得という、まさにアルバイト的な態度でしかなかったのではないかという点である。(『農家生活と主婦像(2)』『農村生活研究』, Vol. 23 No. 2 参照)この点が農家にあって女より男の方が大変だといわれてきた所以である。

だが、逆に、家長制度のなかでは、主婦はあえてそのようなしつけられてきたし、主婦もそのような生きぬくことが家庭生活を円満にしていく方法であると心得てきたというべきであろう。つまり、主婦が耐えることによって、犠牲になることによって農家生活が維持継続されてきた。それが現代の若者の目からみれば、母は「楽しさや悲しさ、憎しみや寂しさの頂点」であったということになるし、「底辺をささえていた」ということになるのであろう。これは男も女も共通して認めることでもあろう。そして、その点にこそ農家の嫁飢饉の一因があるともいえる。すなわち、主婦としての母を知る男は、その存在が大きい故に若い女性に「嫁に」という勇気を失い、女も若い農業後継者の「嫁に」という声に勇気を失う。

この小論は過去2回にわたり『農村生活研究』に発表してきた「農家生活と主婦像」の延長である。第1回、(Vol. 19 No. 2 1975)が主婦像の理論的モデルであるとするなら、第2回(Vol. 23 No. 2 1979)は主婦自らが行った評価にもとづく主婦像であり、今回は第三者である子供がみた主婦像である。筆者の所属する鯉淵学園(三年制の農業大学校)の学生たちが見、考える主婦像である。

2. 農家の主婦の役割と悩み

私が母の最も好きな点は、母が自分の身に嫌なことを引き受けて、ぐちもいわずに黙々と働いていることです。

父が酒を飲んで帰り夜寝ている時、風が吹いたりしてナスの苗床がダメになりそうになると、一人て夜の

1時でも出かけてゆき、一人で苗床のビニールを直し
 コモをかけています。そのほかこまごまとした仕事を
 朝から夜遅くまでしています。

前述したように、農民であり主婦である農家の主婦は
 うえのO君（茨城県出身）のいうようにぐちもいわずに
 黙々と働いている。その点では昔も今もあまり変わらな
 い。それでも今は、さきの老農婦が指摘するように年寄
 りがある程度己を殺すことによって、嫁は自己

主張が可能になった。しかし、反面、農家の主婦には新
 たな役割と期待が寄せられている。

図1は茨城県婦人農業従事者セミナー参加者のレポ
 ートにあらわれた農家主婦の悩みを筆者なりに整理したも
 のである。ここにみられるように、農薬使用は主婦に一
 主婦として健康管理面での不安をもたらし、高学歴の浸
 透や非行化の問題は主婦に母としての教育の責任が問わ
 れ、大型機械操作の現代農業は主婦に農業労働者として
 管理操作の精神的負担を押しつけている。また

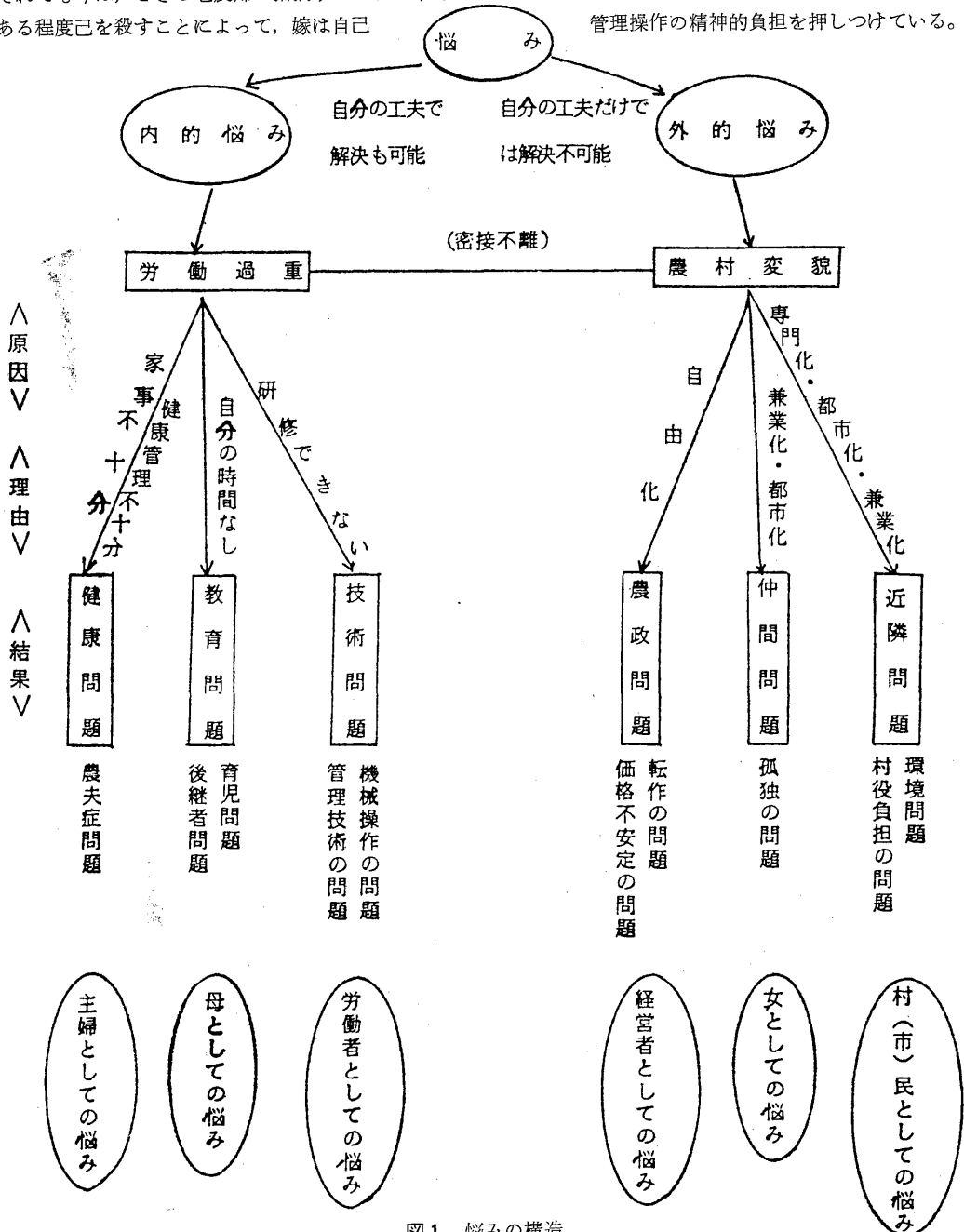


図1 悩みの構造

主婦の息ぬぎの場であり、女としての解放の場であったグループ活動も都市化、兼業化による農外就労の進行で瓦解し、その結果、特に農業者主婦は孤独になった。そればかりか村役的なものが、ただ家に毎日いるということによって押しつけられてきている。このような問題は彼女たちに一世代前の農家の主婦と異なる役割を期待されている。

しかし、この悩みのなかには自分の工夫や家族間の相互理解だけでは解決が困難な問題がある反面、それらによって解決可能な問題もあることは事実である。例えば、農村社会全体ないし国家的次元からくる問題は主婦の力だけでは解決困難であるかもしれないが、労働過重の原因で生ずる健康問題や教育問題・技術問題はある程度解決可能といえるだろう。さきのO君のお母さんの悩みなどはその一例である。主婦が農業労働にたずさわる時間を減らすことによって、あるいは労働力に見合う規模に適正化することによって、いずれにしても「考え方」次第である程度解決可能なものもあるといえよう。

3. 欠ける男の理解と自覚

農民としての父はなぜか私の頭の中にある農民から離れている。どうしてかという、あくせく仕事はしないのである。朝一番遅いのは父であり、休みながらしかもゆっくりあせらず仕事を行なっている……。

もう一面として趣味の生活の父である。古銭、油絵とったり、古物、詩吟、8ミリ映画と自分の好きなことをやっている。金なんてあくせく作るものじゃなく生活を楽しむんだというのが父の口ぐせで、ふだんはあまり話さない父も趣味のことになると何時間でも話し出してとまらない……。

今私は、楽しむ農業を父のものだけではなく、家族全体で楽しむようにしなければならぬ。嫁として長い間、男との戦い、農作業に苦しめられてきた母への父のいたわりが必要であると思ひ、今までの父にはこれが少なかつたような気がする。

この埼玉県出身N君の父親は、彼も他のところでいうように“農民らしくない父親”である。ここには「朝早くから夜遅くまで休む時間もおしんで仕事をする」という農民の姿はない。労働過重で健康管理が心配される農民の姿はない。おそらく個性ある農民の一人といってもいいのではないだろう。しかし、この父親も息子の目からみれば理想的な農民像ではない。それは一人生活を楽しているからであり、母へのいたわりをぬぎにした生き方であるからである。

さきのO君の場合もそうであるが、学生の作文にあら

われた父親像のなかには対母親への態度に対する批判的なものが多い。殊に男子学生にそれが目につく。むろん、かような父親像というものが農家に残る家制度のなかから出てくることは否定しようもない。そこに村上信彦氏の指摘する「慢性化した農村の嫁飢饉を解消し、農家に娘がすすんで嫁いでくるようになるにはどうすればいいか」というと、根本的には家制度を否定して新しい結婚生活を築く以外にない(『日本の婦人問題』岩波新書)とする農家の実態がある。男にとって理想的な農家生活の送り方であっても、主婦たち一人一人にとっては自由に人格を發展させえない農家生活は若者には魅力がない。殊に、外から女が入ってくるという日本農村の一般的結婚制度の下で、ただですら弱い立場に立たせられる主婦に魅力は薄く、それだけに一層母に対し「父のいたわりが必要である」とする農業後継者の目は切実である。日本の大規模農業経営者(会員資格の目安所得1,000万円以上)によって組織されている日本農業経営者連盟(会員数は54年度現在で約80名)には、プロ農業者の条件として「妻子の教育に力を入れる。後継者が育たないのは経営者ではない。旅行も居場所を常に教える」(渡辺正信“プロ農業者の条件”農民教育研究会 54・6・30)というのがあるそうだが、新たな農民像といえよう。妻子も一個の人格者として認める。経営参画者の一人であるという自覚が農家生活を変えることはあきらかである。

このように男の自覚が農家生活を変える大きな力であることはいうまでもないが、主婦の場合はどうであろうか。“はじめに”の項でふれたように農業経営者として自意識に欠けていなかったのか、学習態度に自力性を失っていなかったのか。「ぐちもいわずに黙々と働くこと」が美徳と心得ていた一面はなかったのか。つまり、一人の人間としての自覚で農家生活を営んできたかどうかとわれなければならない。

4. 女子学生の主婦像

母は父よりも学があり文学・絵・書道などに興味をもっており、最近では子供たちが大きくなり自分の時間がもてるようになって読書したり、書道をしたり、縫うことまですることができるようになった。母の持っていたものがようやく発揮できる望ましい家庭生活が営めるようになった。小説なども好きで2・3日で読み終えてしまひ、私などとてもたちうちできません。私も母のように趣味を沢山もち農業を営んでゆきたい……。

これは福島県出身のT君の母親像であるが、ここには

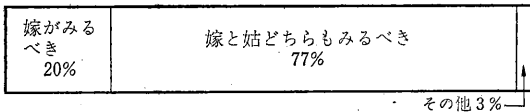
今までとりあげてきたものとは異なった主婦像がみられる。「美しい人間性」を取り戻した主婦の姿があり、「自由に人格を發展させる」主婦の姿がうかがわれる。

かつて、若い農村女性が「百姓の嫁になりたくない」理由は次の3点にあったといわれる。(鶴田知也『農村の青年と女性の生き方』文教書院 昭34)

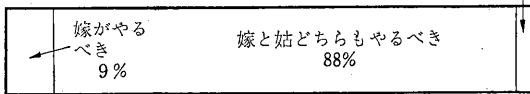
- 1) 労働がづらいから
- 2) 姑の圧迫に耐えられないから
- 3) 農村に娯楽がないから

これらに対し、いまの若い農村女性がどんな考えをもっているか興味のあるところだが、ここでは鯉淵学園の小林信子さんが学園の全女子学生を対象に行なったアンケート調査の結果を参考にさせてもらおう。調査対象者数108名、回収率は79.2%である。ちなみに「農家へお嫁に行くことについて」、「嫁いでもよいと思う」42%、「思わない」12%、「相手しないでわからない」46%となっている。以下の数字は「嫁いでもよいと思う」人の考え方である。

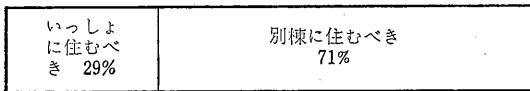
(1) 育児について



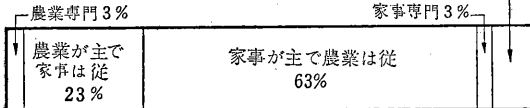
(2) 家事について



(3) 住まいについて



(4) 主婦の農業従事について



この四つの調査結果でみるかぎり若い女性たちは現実的であり保守的であるといえる。「住まい」については従来と異なる志向がみられるものの「育児」や「家事」について「嫁がみるべき」「嫁がやるべき」の数字はきわめて小さい。このような結果となるのは彼女たちがほとんど農家の子女であって、農家生活の実態について熟知しているからともいえる。

しかし、そのようなタテマエとは別に、ホンネをあらわしているのが「主婦の農業従事について」の結果であろう。はっきりと家事志向があらわれている。この点は「農家生活と主婦像(2)」に示した若妻の家事志向より経営志向という結果と対比して興味のあるところだろう。

ひき続き小林さんの調査結果についてみてみよう。次の結果はうえの(4)と(1)および(2)をクロス集計したものである。

(5) 「農業が主で家事は従」であるべきだと思う人

| 育児について | | 家事について | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| イ、嫁がみるべき | 11.1% | イ、嫁がやるべき | 11.1% |
| ロ、姑にまかせるべき | — | ロ、姑にまかせるべき | 5.5% |
| ハ、嫁姑どちらもみるべき | 83.4% | ハ、嫁姑どちらもやるべき | 83.4% |
| ニ、その他 | 5.5% | | |

(6) 「家事が主で農業は従」であるべきだと思う人

| 育児について | | 家事について | |
|--------------|-----|--------------|-----|
| イ、嫁がみるべき | 18% | イ、嫁がやるべき | 10% |
| ロ、姑にまかせるべき | — | ロ、姑にまかせるべき | 2% |
| ハ、嫁姑どちらもみるべき | 74% | ハ、嫁姑どちらもやるべき | 86% |
| ニ、その他 | 8% | ニ、その他 | 2% |

この相似する二つの結果が意味するものはさきへのべたホンネとタテマエのちがいである。ホンネの部分は家事志向であり、育児・家事共に嫁の責任とみなすわけだが、タテマエ（現実）は嫁姑協力型で営まざるをえないというものである。これが当然将来の悩みのタネになるわけだが、一方で家族経営としての農業を営む農家生活は、主婦が「農業が主」でいくにしろ「家事が主」でいくにしろ、嫁姑協力型で臨むしかないという見通し方が働いていると思われる。そこにはさきにふれた「百姓の嫁になりたくない」理由としての「姑の圧迫に耐えられないから」というのが消えているともみてとれる。

次に農村の娯楽にもつながる「趣味」や「レクリエーション」等についての彼女たちの志向をみておこう。

これによると「趣味について」は「楽しめるものをもつべき」、「レクリエーションについて」は「行なうべき」、「グループ活動について」は「やるべき」というのが全員の答である。また「催し物等の会合参加について」は「参加すべき」というのが83%を占める。この数字が意味するものは積極的姿勢である。いたずらに手をこまぬいていようという姿勢ではなく、自ら動き出さねばならないとする姿勢である。要はかような態度を受け入れていこうとする姿勢が嫁を受け入れる農家側にあるかどうかの問題である。受け入れていったときにT君の母親のような「趣味を沢山もち農業を営んでゆく」主婦像ができあがってゆくのではないだろうか。

5. むすび

母自身の幸福や悲しみ、憎しみや愚かさなど、それこそ母自身で、原因の一部に農家であるから、という

ところがあるのは見逃しがたい事実であるし、母の時代に生きた農家の主婦の悲しさでもあるように思う。

牛馬の如く働き、炊事もし、家庭そのものといった感じの母もやはり一人の女性であるし、人間であるからには私の批判も尽きないであろう。どちらかといえば母の望んだもの、現実、過去の母の特異な諸感情が総じて私の批判になってしまいそうだ。

冒頭の「私の母」を書いたA君の文章の結びに近い部分である。彼にとっては、母の現実および過去の特異な感情がすべて批判になってしまうというのである。それはいうまでもなく無批判に生きてきた母の姿に対してである。この反発こそ農家の主婦のあり方への反省といえよう。若い農村女性たちが育児・家事のあり方に嫁姑協力という現実的な形で答える反面、主婦はやはり「家事が主で農業は従」であるべきだと答えるのも、母への批判から生まれた答だとみるべきではないのか。同様に、趣味はもつべきだ。レクリエーションは行なうべきだ、グループ活動は行なうべきだ。催し物等の会合には参加すべきだと積極的に考えるのも、母たちに欠けた行動であったからではないのか。とにかく、若い女性に直接金もうけにつながらない部分への関心が非常に高くなっていることに注目しておかなければならない。

確かに分化・分業化あるいは専門化の著しい今日の産業経済分野にあって、それに順応しきれない農業経営は困難である。しかし、かような現象が、他方において人間の生にあるべき創造性、自己充実性を奪い、かえって人間の自己空虚化・自己喪失を作り出している実態にも目を向けておかなければならない。このような人間性の喪失、人間の疎外といった問題が発達する産業経済にあってとわれるなかで、農業が、ある意味で前近代的であるが故にそれらを保ち続けていることにも注目をしておかなければならない。そのような目が現実には養われるようになってはじめて農家の嫁が、農家の主婦が底辺となって支えてきた労苦が報いられるというものではないのか。生産と生活の分離化傾向が進むなかで両者を一体とする農業は貴重であるとする見方もあってしかるべきであろう。若い農村青年たちにはそんな萌芽がみられるといてもいいすぎではない。

母はいつも顔をくちやくちやくしながら笑い、節くられたゴツゴツした手でダンゴをつくる。時々、もち米の粉と小麦粉をまちがえたダンゴを作ったり、ダ

イズにお湯をかけようとして自分の手にかけたりする。そんなドジな母は子どもたちに馬鹿にされたり、笑われたりする。けれども家庭を暖かく明るくする。

このように書く宮崎県出身のTさんの家庭生活は農家でなくては生まれないような気がする。

繰り返しになるが、農村青年たちは母に対し無批判に生きようとするのではない。彼らの描く主婦像は自分たちの母親とははっきり一線を画すものであることも改めて指摘しておく。これは高知県出身のNさんの書いたものである。

私が高校を卒業する時、進学を勧めてくれたのも母である。自分が少女時代経済的理由で女学校をあきらめた経験を話し、3年間の親の苦労など何でもないと私を送り出してくれた。

母のゆい言は私を卒業させることだけであった。兄姉や子供、そして夫に見守られ息をひきとる時の母の顔は満足感にあふれていたように見えた。

今私は母の人生を考えて母と同じ道をたどりたいとは思わないけれど、母は母なりに一生懸命生きたと認めてやりたい。そして私は、母よりも大きく自分の人生を生きよう。私は私なりに「生きた」といえる時間をすごそうと思う。

ただ、彼らがこのように批判し一線を画す母親像が、今後どのような形で新しい主婦像となって展開されていくのかは断言できない。しかし、さきに述べた農業が、ある意味で前近代的であるが故に人間性回復の要因を孕んでいることに彼らが気づいた時に、農家の嫁が、主婦が底辺となって必死に支えてきた前近代的な農家生活にみられる意義を再発見する新しい主婦像に帰着するだろう。そして、彼らが現状では母親の生き方を否定してみるもののおそらく気づいていないであろう「家事が主で農業は従」であるべきだという時のその農業の意味内容に気づいた時、「母は母なりに一生懸命生きたと認めてやりたい。そして私は、母よりも大きく自分の人生を生きよう」とする新しい主婦像が生み出されてくるだろう。今日、土と無縁な都市サラリーマンの家事専業主婦にみられる家庭菜園へのあこがれ、熱心な有機農業への関心がそれらを解く鍵を与えてくれている。

(あんどろ よしみち、鯉淵学園)